

の国のためにいつしよけんめい尽くすことです。このことを誓約書せいやくしょに書いてください。」

何を言われるのかと心配していた健次郎の顔は、感激とうれしさに紅潮こうちょうした。

「私も、夫人と同じ考えで日本からはるばるやってきました。きつとお約束します。本当にありがとうございます。きつと、ご期待にそうよういつしよけんめい勉強べんきょうに励はげみます。」

健次郎の目には、感謝の涙が光っていた。

健次郎は、今までよりいつそう大学での勉学べんがくに全力を傾けた。この間にも、日本からは何度も帰国命令きこくめいれいが来た。これをことわり続け一年半が過ぎた。ついに卒業である。バチエラー・オブ・フィロソフィーの学位を受け、明治八年（一八八五）五月、二十二歳になった健次郎は、四年半ぶりになつかしい日本の土を踏んだ。十五歳のとき、お坊さんに連れられて会津をぬけ出してから、七年